

エリア ウェブ

峡東教育事務所
 地域教育支援スタッフ
 TEL 0553-20-2737
 FAX 0553-20-2733

閲覧・配布をお願いします。増す刷り配布はご自由にどうぞ。 この情報紙は山梨県庁のホームページでも掲載中です。
<http://www.pref.yamanashi.jp/barrier/html/kyoiku-hym/index.html>

「^{びっくり}喫驚したいというのが僕の願いなんです」

峡東教育事務所副所長 内藤 義仁

^{びっくり}
 「喫驚したいというのが僕の願いなんです」

この文は、国木田独歩の短編「牛肉と馬鈴薯」の中にあります。作品の場面は、明治時代の社交倶楽部に集まった人々が、それぞれの人生観（現実主義か理想主義か、どちらが良いのか）を語り合っているところへ、国木田独歩の分身である主人公の岡本が現れ、自分の人生観を語る場所です。牛肉は現実主義を表し、馬鈴薯が理想主義を表しています。内容は、独歩の思想を主人公が語っているの、難しい点もありますが、岡本が、牛肉や馬鈴薯の言葉ではなく、この言葉を言ったので、集まっていた人々は、あまりの唐突な言葉に、あきれてしまうのです。

そして、次に出てくる言葉が、「宇宙の不思議を知りたいという願いではない、不思議なる宇宙を驚きたいという願いです！」となります。しかし、やはり理解されず、主人公は苦悩します。

国木田独歩のいう驚きたいということ、大人になれば経験や知識が豊富になり、それらが優先して、驚きが少なくなってしまう。不思議を知るのではなく、子どもが驚くように、年をとっても驚く気持ちを味わいたいということです。

私は、教師になりたてのときに、子ども達にとって学習とは何か考えていたことがありました。いろいろな教育の専門書を読みましたが、いまひとつ納得がいらず授業をしていました。そのとき、子ども達の表情を見て、学生時代に読んだこの作品を思い出したのです。それ以来、私は、授業研究を行う時に、この文を座右の銘として思い出しています。

子どもが、勉強はつまらないと言うこ



とがあります。その原因の一つに、学習による驚きを味わっていないことがあげられます。学習に必要なのは、「今まで知っていたこととは違うぞ。」

「不思議だ。」「どうしてだろう。」「調べてみよう。」「という気持ちから抱いた疑問を解き明かし、「なるほど。」「わかった。」「できた。」「もっとやってみよう。」などの気持ちに至ることであると考えています。これらの情動があった時、子ども達は、素直に驚き、喜び、その時の表情は、生き生きとしたすばらしい表情をします。学習を仕組む者(学校では教師)にとっての醍醐味は、学習者がこのような情動を持ち、目や言葉で表現した時です。

例えば、驚くといえば理科の授業がすぐ思い出されますが、百科事典で調べたり、ビデオで見ただけでは、単なる知識だけで驚きや生きた知識にはなりません。また、マニュアルに基づいて実験をしても、結果はマニュアル通りになりませんが、理科の本来のおもしろさの驚きには結びつきません。疑問を抱き、実験や観察を通して、疑問を解き明かしていくことこそ驚きが生まれ、学習の喜びにつながっていきます。

年齢に関係なく、人間にとって学習というのは、この情動が根幹となります。学校教育においても生涯学習においても、学習を仕組む側は、学習の楽しさや驚きのある授業を創造し、それに関わる教材の工夫をしたいものです。教育事務所が、この点においても学校及び関係機関に少しでもお役に立てればと考えています。

すずめの子育てパート2

～命の大切さをどう感じさせるのか～

右の写真は、わが家の玄関の軒にある「すずめの巣」です。毎年、同じ場所に巣を作り子育てに励んでいます。

昨年度の「エリアアップデート」に、わが身はぼろぼろになり、やせ衰えても、懸命に子育てをする親すずめの姿の話を掲載しました。(H 18年6月、第27号)

数年前、わが家にある事件が起きたことを思い出します。



ある日の夕方、私が仕事から帰ってきますと、娘が雨どいの下の方をじっとのぞき込んでいます。

「どうしたの?」と聞くと、「すずめの赤ちゃんが落ちたらしいの。」と言うのです。そばに近づくと、たて樋の下の方から「チュン、チュン」という、か細い鳴き声が聞こえてきます。でも、たて樋は地面の中まで入っています。

「これでは助けようがない。無理だな。」と思ったのですが、娘がすがるような目で私を見つめています。

しばらく悩みましたが、子すずめを救出することにしました。そして、糸のこぎりでプラスチックの樋を切り始めました。新築してまだ間もない頃で、なかなか切り出せなかったことを覚えています。

それでも手が入る大きさまで切って、娘に取らせようとしたのですが、地中深くまでたて樋が入っています。私も試みましたが無理でした。木の枝を入れてみましたが、それにつかまって出てくるはずありません。何時間もからかってみましたが、結局すずめを助け出すことはできませんでした。

次の日の朝、か細かったすずめの声はもう聞こえなくなっていました。樋を切った後だけが、むなしく口を開けていました。

よく「命を大切にする子どもに」と言います。でも「命は大事だぞ」と何十回言うより、命や死について考えるような体験をする方がずっと心に残ります。

葬式のとときに、キャッキョと走り回る子どもたちを時々見ます。できることなら実際に対面させ、亡くなった人の思い出などを語ったり、死に水をとらせたりすることをさせてもいいのではないのでしょうか。子どもは、そういう事実を通して、「死」というものを頭ではなく、心で、全身で感じ取るはずです。

全ての生物は、この世に生まれたときから、「死」というゴールに向かって進んでいきます。それは、避けることのできない宿命であり、ごまかしたり、遠ざけたりできるものではありません。

今年のわが家の玄関は少し様子が違います。巣の左に、すずめではない鳥がいるのがお分かりでしょうか?

実は、すずめの巣の隣りで鳩が巣を作り、子育てをしているのです。まだ卵なのでしょうが、親鳥はじっとして動こうともしません。時々首をキョロキョロ動かし、辺りを見えています。

すずめと鳩。仲がいいのかどうか分かりませんが、今年もにぎやかな玄関から、新しい「命」が誕生しそうです。





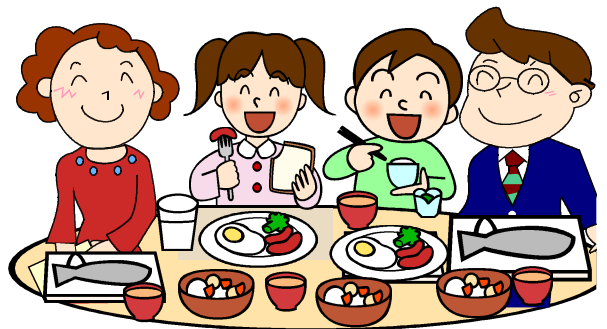
「早寝 早起き 朝ごはん」

規則正しい生活リズムで、心も頭も身体も健康に！

「子供だけで朝食」4割

(厚労省調査)

5月17日付けの山日新聞に、この記事が載っていました。一人で朝食をとっている子が2割近くいるそうです。いろいろな事情があるでしょうが、工夫できることはないか、一日のリズムを考えてみてはいかがでしょうか。



家族みんなで 少し早起き
簡単手作りで 心にも栄養を！

朝はどの家庭も忙しいものです。子どもだけ早起きしても、親が布団の中から「行ってらっしゃい。」ではさみしいですね。

「早く起きなさい！」ではなく「おはよう。」で一日をスタートしたいものです。

みんなで少し早起きをしてみる。朝、日光に当たる。ご飯とみそ汁、パンと目玉焼きなど、親が作ってくれたものを食べる。「おいしいね。」「お代わりあるよ。」そんな会話を通して、穏やかな気持ちになり、一日の元気が出るものです。

朝ごはんは「トリプトファン」朝ごはんの中には、トリプトファンという必須アミノ酸が含まれているそうです。これは様々な食品のタンパク質に含まれていて、私たちの身体にとっても重要な働きをしてくれます。

《朝ごはんのパワー》

- 体温を上げる
- 脳が活発に働く
- 快便で胃腸もすっきり
- 肥満の予防になる



体温が上がらないまま、登校すると、思いがけないけがにつながります。

朝からグッタリしている子どもも少なくありません。授業だってなかなか集中できないでしょう。

昼間の元気の素「セロトニン」トリプトファンが、やる気・元気の素となるセロトニンに変身します。昼は、頭と身体を活発に動かしましょう。

また、セロトニンは、精神を安定させる働きもあります。朝からイライラ、ダラダラしている子に頭ごなしに怒るより、「今日、朝ごはん食べてきたの?」と聞いて、対策を立てる方が効果的かもしれませんね。

熟睡のための「メラトニン」

トリプトファン セロトニンを経て合成されるのが、「メラトニン」です。これは、睡眠を促し、身体のリズムを調整する働きがあるそうです。

また、眠っている間に脳下垂体から成長ホルモンが出て、身長を伸ばす働きをします。これが肥満の予防になります。

さらに、大人は睡眠不足だと日中に居眠りをしますが、子どもの場合、眠気を意識できないために、動き回ったり、イライラしたり、眠気を打ち消すような行動をとるときがあるそうです。

(国立保健医療科学院社会疫学室長の話より)

トリプトファン セロトニン メラトニン。何か難しい名前ですが、私たちの身体の調子を整えるためにとても重要なことが分かります。

栄養剤などには頼らず、しっかりした朝食をとるようにしましょう。

「命あつての子育て...」

妊娠や出産の時には、「無事でさえいてくれればいい」「五体満足であれば十分」と思った方は多いのではないのでしょうか。ところが、無事に産まれた子が、ひらがなが書けたり、漢字を読んだりしようものなら、「末は博士か大臣か」となる。博士と大臣が無理なようだとなつて、「成績はトップじゃなくていいさ。中の上でいいよ。」挙げ句の果ては「並でもいいさ。」となる。子どもは寿司屋のネタじゃありません。親の望みはこうして、膨らんだり、しぼんだりするものです。

でも、やっぱり「子育てができる」子どもがいることが幸せなのですね。そんな大切な子どもたちが、安心して暮らせる地域をつくっていかねばなりません。



峡東地区の
スクール
ガードの
皆さん

5月12日(土)に、甲州市中央公民館で「スクールガード講習会」が実施されました。地域の安全をより高めるために、スクールガードリーダーの方々を中心に熱心な話し合いがもたれました。

また、多くの安全ボランティアの方々が、安心して生活できる地域や学校のために努力してくださっています。

《峡東地区のスクールガードリーダーの皆さんです》



上は鶴田さん。
左より長田泰子
さん、長田明雄さん、
林さん、原さん、武
藤さん、戸泉さん、
千葉さん。

講演では、次のような話がありました。

《子どもの危険回避研究所副所長》
西江 麻由美氏より

子どもに「危険回避能力」を！
大人が守るだけでなく、子ども自身も
危険を回避する力を身につけること。

危険回避能力とは、
想像力(何が起きるのか予知する)
判断力(どう対応するか考える)
瞬発力(すぐに行動する)
コミュニケーション力(情報を得る)
精神力(がまん強さ、諦めない心)

何より、「入りやすく・見えにくい」
場所に近づかないことが大切。

子どもに危険について考えさせる。
「不審者に気をつける。」では人間不
信になりかねない。また危険な場所を教
え込むのではなく、子ども自身に考えさ
せ、気づかせていくことが大切。そのた
めには、子どもたちに「地域安全マップ」
(考案；立正大学 小宮信夫教授)を作
成させることが非常に有効である。

《日下部警察署 生活安全課長》
藤田 貴仁氏より

「声をかけられる」事例について
多い時期は5月～6月。(今です！)
午後2時から6時の間が最も多い。
一人でいるときが一番危険だが、複
数でも油断すると危ない。
声をかけられた子の60%が小学生、
20%が中学生である。(女子が多い)

いわゆる「声かけ事例」は、不審者な
のか、近所の人なのか区別が難しいとこ
ろです。日頃から、地域のコミュニケー
ションが大切です。

